

## 生活場面の移行を援助するソーシャルワークの事例の研究

立命館大学応用人間科学研究科  
対人援助学領域  
家族機能・社会行動クラスター  
田中 真美

医学の進歩に伴って、医師の専門領域はより細かく分かれたが、実際の医療現場で筆者は、医師が患者の生活や人生を考え、その家族の状況なども視野に入れながら治療方針を立てている場に立会い、医師とともに協同した。従来より、ソーシャルワーカーの固有の役割と認識されていたものがそうではなくなり、多方面からの援助によっても患者・家族のニーズが充足されるようになりつつある。これは医療ソーシャルワーク（本論ではソーシャルワークを SW と表記している）と隣接諸領域がますます曖昧なものになり、その境界の意味も含め、その独自性・固有性が認められにくく、専門職とみなされにくくなってきている厳しい現状にソーシャルワーカーが置かれているといっても過言ではないだろう。生活場面の移行を援助する事例の中で、ソーシャルワーカーが黒子として存在し、そこでどのような役割を演じているのを検証することにより、一人の人間の自立を支えるということは、それぞれの個人によってどのような意味を持つのか、医療という枠組みの中で本当の意味の自立を支えることができるのかなどを検証していくために本論では、事例を取り上げるにあたっては、事例の中に医療という場面の固有の性格と、ソーシャルワーク全般についての共有できる性格があり、論を焦点化するために医療に絞り込んでの事例を使った。筆者が臨床現場で事例として扱った 500 例の中から今回選んだ 5 例については条件などのカテゴリーでは絞らずに、無作為に抽出し、研究方法としては、エピソード記述分析と、エコロジカル分析を用いて分析した。その結果として、社会資源（制度、自助具、人など）を提案していくことにより、入院前の状況よりも病状が悪い状況になったとしても気持ちが上向いたり、前向きな発言も多くなるなど、その不安な状況が資源の有効な利用により軽減される状況へと移行していくことが導き出すことができ、また、クライアントの発言により、援助者が情報収集ができ、その情報の中から、援助者として、クライアントへの場面展開の援助を考えると、援助者は常にクライアントによって変えられ、そして、援助者がクライアントを援助することによって、クライアントがまた力づけられていくという相互作用がエコロジカルシステムモデルに当てはめることにより、確かめることができた。一方、利用できる社会資源と、人の生活とは、密接な関係にあり、それだけに、社会資源（社会施策、社会制度など）の変化により、個人の生活、環境が変わることが抽出した 5 例の事例からもわかる。社会の流れ、社会の中の地域の環境、地域の環境の中で生きる家族の生活、そして、その家族の中での個人、その個人の抱える問題が、変化するというエコロジカルな視点は、SW において、大切なものであるといえる。社会福祉援助技術の中で本論で述べたエコロジカルな視点が、社会の中の環境・地域・家族・個人という関係性において、その相互作用により、人の生活は変化し続け、その中で生きる人は、変化をし続けることが理解できた。この急激な社会変化のなかで今こそ、社会福祉援助技術（ソーシャルワーク）の固有性を含め「人」として生きる、人生のすべての生活場面において社会福祉援助技術（ソーシャルワーク）が有効な役割を果たすこととなるという固有性についての新しい研究方法が開発され、社会福祉援助技術は、新しい時代の対人援助観の確立の機軸になることを願っている。